

We are a DARKHERO

Othuyeg

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

土曜日の実写映画『VENOM』を見て書きたくなったので、思いついたアイデアを書いている作品です。

まあつまり、2021/8/7『VENOM』放送記念というワケだ。少し遅くなつたがな！（8/9、20:50現在）

目次

戦姫(シンフォギア)か?否、私は(We	
a r e)	
黎(くろ)い暴威	
11	1

戦姫（シンフォギア）か？否、私は（We are）——

14:26。東京、成田国際空港。

アメリカ発の旅客機から、一人の少女が空港内に降り立った。猜疑心頭あらかわで、非常に醒めた鋭利な眼光、脱色され真鍮色になっているミディアムカットの髪。日本刀のように鍛え上げられ、ギョツと絞られた健康的な肢体からは、一切の無駄な筋肉が削ぎ落とされて、女性的な魅力を逆に引き立たせている。

どう見ても、ただの日本女子高生の帰国には見えない。もしアスリートだと言われたら、疑いもせず信じてしまうかも知れない程に、彼女は研ぎ澄まされた気迫を纏まとっていた。

「——それで？　まずやることは？」

「買い物だ。ポテトスナックとチョコヲ買おう」

「毎回そればっか。シンビオートに飽きるって概念はないの？」

「ないナ。タダ、今回ハ買い物溜メスるダケダ。今日は和食ノ気分デナ。セツカク本場ニ来たんだ、食ベナイト損ダろう」

「はいはい。じゃあまずはアメリカドルを日本円に替えないと……」

傍^{はた}から見れば、携帯端末で誰かと話しているか、独り言をブツブツ呟き続ける奇人にしか見えない。だが、それが独り言ではないことは、結構多くの人が知っている。特に、アメリカでは。

「さてと……だいたい1年半ぶりくらい、かな？ さよなら、薄っぺらなアメリカ。ただいま、くそつたれの日本」

〔仮ニモ『母国』ツテヤつだロウ？ヒドい言イヨウだな〕

そんなことを呟きながら、その身に纏う気迫を殺し、外の人混みに紛れてゆく。その姿は、瞬く間に喧騒の内側にするりと融けて消えていった。

彼女の名は「立花響」。この2年、アメリカで活躍したダークヒーロー、「ヴェノム」の正体である。

『ライブ会場の惨劇』。TVでは『双翼の惨劇』『ツヴァイウィングの惨劇』などと呼ば

れ、一時期、熱狂的に取り上げられたトピックであり、史上類を見ない大災害、大事故である。

この事件が、「ノイズ」によるただの特異災害であれば、今の響は無かつただらう。『ツヴァイウィングの惨劇』が殊更に話題にされたのは、死者の3分の1が人災によるものだったからだ。

週刊誌特有の悪意的な修飾を織り交ぜた記事——なまじ正確な分、より性質が悪い——や、単純な計算も出来ない無能コメンテーターのコメントに憎悪を煽られた民衆は、生存者たちに対し苛烈で悪質なバツシングを始めた。

故に、その場に居合わせた響もバツシングの対象になった。

殴る蹴るは日常茶飯事、ホースで水を被せるのは当たり前。机は常に悪口雑言に塗れ、消しても消しても次の日にはまた机を埋め尽くす。

途中からは、きつと原因や意味などどうでも良くなったのだろう。まるで競い合うように、いじめはより卑陋品性・言動などがいやしいこと。見識などが浅はかであること。また、そのさまに、陰湿に、醜悪なものになっていった。

上靴に納豆を詰める、シューズロッカーに五寸釘を詰める、本人の居ないうちに弁当をひっくり返して箱を破壊する、バッグをトイレに捨てる、服を剥き下着のまま縛ってクラスに放置、身の回りの全てをチョーク塗れにする、裸にして撮影、詐欺、強盗、果

ては味方を騙^{かた}つての強姦^{かた}まで。これらは全て作者が考えたものです。公式にこんなことが行われたという記述はありません m () m

人間の集団意識とはかくも恐ろしいものなのだろうか。みんなやっているから、相手は人殺しだから——。そんな大義名分を振りかざし、多くの人を死に追いやる悍^{おそ}ましい鳥合の衆……。そんな異常存在在共の中、響はグレかけながらも、耐え続けていた。

——あの日までは。

「——え？」

響へ。

引越すことになりました。直接言えなくてごめんなさい。お母さんに口止めされてました。だから、こんな形でしか言えなくて……。でも、どれだけ離れていても、私は響のことを想っています。

p. s : お母さんは最後まで隠そうとしてたけど、引越し先の住所を手に入れました。下に書いておきます。

未来^{みく}が引越した。ただそれだけの事実が、響にどれほどの絶望を与えただろう。実際、その直後に響は姿を消した。家族の必死の搜索も空しく、立花響という人物は煙のように忽然と消え去った。

では、響はどこへ行ったのか？ アメリカである。世界一薄っぺらい国、アメリカ。

世界で唯一固有の神話を持たない国、アメリカ。あくまで響自身の考えです。作者がアメリカに過剰なアンチ思想を持っているワケではありません。自分も新たな生活を始められると考えたのだろう。

——まあ、そんな浅慮でアメリカに渡ったものだから、彼女はすぐに壁にぶち当たった。

お金が無い

身分証が無い

まず言葉が通じない

そんな状況で、彼女がとった行動は援交であつた。

身分証も必要ない。言葉も通じている必要があまりない。お金も簡単に稼げる。既に清廉な身ではないし、使えるものは徹底的に使おうと考えた結果だつた。

実際、その方針はそこそこ上手くいった。英語も親切な人が教えてくれて何とかなつた。文化の違いも暮らすうちに慣れた。

しかしながら、上手くいかない時はとことん上手くいかないのが人生というもの。

「う、わああ！ あアがウあ、あッ！ あうウあ！ つあ、ああ！ ……ア、あッ！
ううん、ああ、……あ、ぐう、ウ!!」

アメリカに渡つて半年は過ぎた頃。彼女は、シンビオートに寄生された。

元々その周辺をシマにしていたギャングにとっては、突然現れて客を掻っ攫っていく響は邪魔者でしかなかった。故に、情報の漏洩対策をしていなかった響が、すぐにギャング共に捕まったのは至極当然の結果だった。

素性の知れない商売敵を排除するため、ギャング達は響にシンビオートを寄生させた。

——が。ギャングにとつては不幸なことに、シンビオートが響を気に入ってしまった。

《box: absolute (0.2/0), z 9》「ア…ツグがあ!? ギイっあがア!

があ……! づがつあ…あ…があつあが!」 「落ち着け…拒絶すルナ。大

丈夫ダ…何モ問題ない。俺ニお前を傷ツケル理由は無イ」

《box》

多大な苦痛を払いはしたが、響とシンビオートは見事共生を果たした。そして——

「………Balwisyal nesce llgun gnir tron」

——VENOM^{憎悪}が、覚醒の雄叫び^{おたけ}を上げた。

その後の事の顛末はこうだ。

ガングニールの起動と同時に融合したシンピオートは、高熱と高周波に対してそこそこの耐性を得て暴虐の限りを尽くし、ギヤング共を建物ごと壊滅に追い込んだ。

そして二人——ヴェノムは、ダークヒーローとして活動を始めることにした。人助け^{人を助}がした^助かつた^た訳^たでは無い^た。この方が有名ヒーロー達——即ちアベンジャーズ——に接触できると考えたからだ。そして、悪人への強い憎悪と、寄生体故の破壊衝動も理由だった。

結局、その目論見は成功し、STARBUCK INDUSTRIES現社長にして二代目アイアンマンたるモーガン・スターク エンドゲームの5年後の2023年時点で45歳のため、シンフォギアの年代である2042年では23歳は、新たなヴェノムに興味を抱き、響達と接触。彼女の身の上を聞き、彼女の身元引受け人となつて

アメリカ永住権を与えた。この辺は少し適当です。スマソく（「」）>へゴン!

その後、何の心配も必要無くなった響は、気兼ねなくヴェノムとしての活動に専念したが、モーガンの勧めと未だ燻っていたノイズへの憎悪から日本に帰国。そして冒頭に
戻るといふ訳だ。

じゃあ今はどうしているのか？ それは——

「ノイズの反応、検知！ 位置、リディアンから南東側約280m!」

「よし、翼を出撃——」

「!! 別の反応の出現と共にノイズの反応が急激に縮小! ——照合完了、これは……
!!」

／／／／／／／／／／／／／／／／ code : ／／／／／／／／／／／／／／／／

VENOM



——ズシャツ!!

ノイズをズタズタに引き裂き殲滅したヴェノム^音。その姿は正しく、怪物だった。

黎^{くろ}くドロリとした質感の粘菌を表層に纏い、その身の内に宿る力の奔流はその表皮でギチリと圧縮され、彼女の狂暴な姿をより際立たせる。

しかし、その暴力的な威圧感とは裏腹に、全体的な外観はスリムで、それ故に、昆虫にも、狂獣にも似た、兇悪さに満ち溢れた顔面が、より印象的であった。

「なんなんだよ……。なんなんだよ、何者^{ナニモノ}なんだよあんた!! 化け物!」

黎い怪物は振り返る。獐猛に牙を剥き、その顔の右半分を捲り上げて、悲鳴のような問いに答える。

「化け物……? 違うナ。

《box: absolute(0/0), z9》私達はVENOMだ
ノムダ」

《box》

俺達ハヴェ

黎（くろ）い暴威

【VENOM】。
憎悪

兇暴な姿の彼女たちはそう名乗った。

「ヴ、ヴェノム?!　じ、じゃあ、あんたがアメリカを騒がせてた……っ!!」

ビュフウオツ!!

しかし、男の言葉は最後までには続かなかつた。視認不可能な速度で伸びた腕が顔の真横を通り過ぎていったのに、呑気に言葉を続けられる猛者はそう居るまい。一拍置いて、すぐ脇の壁が跡形もなく粉碎されているのを認識し、状況を理解する。

「……さっさと行って。死にたいなら、無理強いはしないけど」

「ひっ、ひいひい!!」

男は一も二もなく駆け出した。一瞬すらこの場にいたくはなかつた。その場に居合わせただけの哀れなあな男は、この夜の出来事を生涯忘れることはできないだろう。

「……それで？　今までだんまり決め込んでたあんたは何の用？　そこにいるんでしょ？　みんなの偶像さん」

響は振り向きもせず、背後にいるであろう存在に向けて声をかけた。

「……………」

「出てきなよ。別に取って食おうって訳じゃないんだから」

「……ばれていたのね」

「そりゃあ、そんなに殺気丸出しじや、隠れようとしてるのかすら怪しいレベル……だよ。で？　やりに来たなら相手、するけど」

響はシンビオートを纏い直す。

「……なら、要件を言いましたよ。【VENOM】……いや、立花響。貴女の身柄を拘束します。その力——ヴェノムと共に身に纏うそのシンフォギアは、貴女が持っている、そんな風に使っていい代物ではない」

「……へえ」

「抵抗するというのがならば、多少手荒な真似をさせて頂きます」

「……ふうん」

「聞いているのか……?!」

どこ吹く風といった態度の響に、翼は苛立ちを露わにする。その苛立ちは口を開いた響のセリフで、更に深まることとなる。

「………ねえ」

「何かしら」

「……あなた達程度の力で私が捕まると、本気で思ってる？ 一人二人は超人級がいるかもしれないけど、私はその程度、何度も相手してる。逃げに徹して振り切れないわけではないでしょ？」

「……随分と舐められたものね。でも、それが事実だというのであれば、試してみると良いわ」

翼は、何時でも攻撃に移れるようにアームドギアを構える。だが……。

「なら、そうさせて貰う。じゃあね。鬼ごっこがしたいなら勝手に追いかけてくれば？」

響はそれに躊躇なく背を向けた。

かかってくるよう挑発したつもりだった翼は、余りにも素早く逃げに転じた響たちに反応することができなかった。

「んなっ……………」

「じゃあね。みんなの偶像さん。次は遭わないことを祈ってる」

「待ちなさ…………ツ！ もういない…………。すみません、逃げられました」

『そうか…………。分かった。そのまま帰投してくれ、翼』

「申し訳ありません、指令…………」

『いや、いい。むしろ俺は、彼女自身の方が心配だ。こうも信用されていないとは…………』

「はい…………ですが、私は彼女を…………」

翼は歯噛みする。何故彼女が奏のギアを纏っている？ しかも、ヴェノムなどという得体の知れないものまで上にかぶせて！ 許せなかった。そのギアは、そんな風に使っ

ていいものじゃない！

『気持ちわかる、なんて無責任なことあ言うつもりはない。だが、彼女が二課に協力してくれれば、心強い戦力になってくれるはずだ。それに……彼女の保護も目的の一つなんだ。どうかこらえてくれ、翼』

「叔父様……分かっております。それでも、納得できないんです。彼女のせいで奏は……ッ！ つく……今は、時間をください」

『……ああ。できるだけ早めに帰ってこいよ』